

半世紀をかえりみて…！

「神戸市民が自己責任－健康管理・体力づくり・精神力・安全確保等－で、物事を成し遂げる気風を育てるために、一度の甘えも許されない事態に取り組んでみよう」を理念に1975(昭和50)年11月23日(祝)に第1回六甲全山縦走大会を実施。

当初300～500名の参加者と考えていたが、2,000名近くの応募があり、当日の参加者が1,560名、うち完走者が1,300名(完走率83.3%)。

当日のスナップ写真展を三宮のさんちかタウン(当時)インフォメーションこうべ・ギャラリーで開催した事で市民間に広く知れ渡り、第2回大会は6,000名、第4回大会は8,000名の応募があるなど大盛況となった。

私も1973(昭和48)年頃からこの企画・PR等にかかわっていたが、六甲山へは車では行くものの、登山などはまったくの素人であったが、第2回大会でなんとか完走することができた。その時の感想は「こんな大会、誰が考えたのか、二度と参加するか!」だった。

しかし、翌年その時期が近づくにつれ「…今年も行ってみようか?」と心変わりをする。

第2回大会終了後、神戸市と市民の共催として、1977(昭和52)年に「六甲全縦市民の会」が発足し、初心者の人をサポートする係として参加する様に、と委員に加わる。

第10回大会(1984(昭和59)年)頃から参加者も年々減少傾向をたどり、存続の可否を含め検討を始める。完走回数による参加制限を解除し、応募も神戸市民から全国に開放し、北海道から沖縄から馳せ参じてもらえるようになり、名称も“KOBE 六甲全山縦走大会”と変えて、“神戸の秋の歳時記”として知れ渡るようになる。

1995(平成7)年1月17日に阪神・淡路大震災が発生し、同年11月の第21回大会は、とても開催でき

る様な状況ではなかったが、「こんな時だからこそ、震災にめげずに頑張っている神戸の心意気を全国の人達に見てもらうために大会を開催しよう」と開催することを決定した。

開催は決定したものの、六甲山上から街の灯りのさびしさ、コース途上の崩壊現場のすさまじさ、私も涙が止まらなかった……。50年の間、新型コロナウイルス禍までは一度として開催を中止することはなかった。

(※事務局注:第46回(2020(令和2)年)、第47回(2021(令和3)年)は感染予防のため中止)

その間、全縦コースは幾度となく変化してきた。そして沿道の風景も変わっていった。しかし、挑戦する人達のスタートの緊張感、「おはよう。いってらっしゃい。ガンバッテネ…」と見送るボランティアの声掛け、完走者の歓喜(夏期の日本の山ならどこでも登山ができると言う卒業証書を手に入…おめでとう。)、途中でリタイヤした時のため息(…来年かならず待っています。)、それぞれサポートする人達の心からの激励…。

そんなさまざまなものが一体となった「全縦の雰囲気」は今も変わっていない…。48年前の当初を知る人はこれほど続く大会になると誰が見込んでいたろうか。今後も初めての人を引き続きサポートし、自身の責任(絶対にコースを走ってはいけないう信念のもと、盛況に続きますように…。

最後に、六甲全山縦走大会にかかわった皆様方全員に深く感謝を申し上げます。そしてこれまでにふれあい、いろいろとお教えいただきました数々の教訓を余生のみちしるべといたします。

ありがとうございました。「六甲山へ登ろう、六甲山へ登ろう、KOBE六甲全山縦走へ参加しよう」と唱えながら筆を置きます。

島岡 稔雄

島岡稔雄氏は六甲全山縦走市民の会発足以来、委員として活躍され、1995年から2020年まで副会長を、2021年から2023年まで会長をつとめられ、六甲全山縦走大会の発展に大きく寄与されました。

六甲全山縦走市民の会 会 員 一 同